地中海古代語へのまなざし
ー移動する人、移動する言葉ー
於京都大学文学部
2023 年 10 月 7 日

地中海島嶼ロマンス語の分布と系統ー名詞の有生性にまつわる諸問題から考える

金澤　雄介（近畿大学）

knzway@gmail.com

本発表の構成

1. はじめに
2. 地中海島嶼ロマンス語の系統と分布
3. 地域的特徴
4. Differential object marking
5. まとめ

略号一覧

参考文献

1. はじめに

- 本発表の背景

地中海島嶼部のロマンス語は、ロマンス諸語の中でそれぞれ異なるサブグループに属する

サルデーニャ語：独立したサブグループ

シチリア語：イタロ・ロマンス語　南イタリア

コルシカ語：イタロ・ロマンス語　中部イタリア

地中海島嶼部は、ローマ帝国の植民地化が比較的早かった

紀元前 241 年　シチリア島

紀元前 238 年　サルデーニャ島、コルシカ島

紀元前 197 年　スペイン

紀元前 120 年　フランス南部

紀元前 50 年　フランス北部

(Tagliavini 1982: 97)

- 本発表の目的

地中海島嶼部で話されるロマンス諸語（サルデーニャ語、シチリア語、コルシカ語）における地域的特徴について、特に Differential object marking の観点から考察する

- 本発表の主張

ロマンス諸語において異なるサブグループに属する言語に、地域的な特徴が存在することを示し、地域言語学的な概念としての「南ロマンス諸語」を認めることの可能性を探る

2. 地中海島嶼ロマンス語の系統と分布

「地中海島嶼ロマンス語」の分布

本発表で扱う言語

(1) サルデーニャ語

- 大きく分けてログドーロ方言（島北部～中部）とカンピダーノ方言（島南部）がある

- ロマンス諸語の中でも最も保守的な特徴を持つ

語末の t の保存：Lat. cantat > Sard. cantat「彼は歌う」

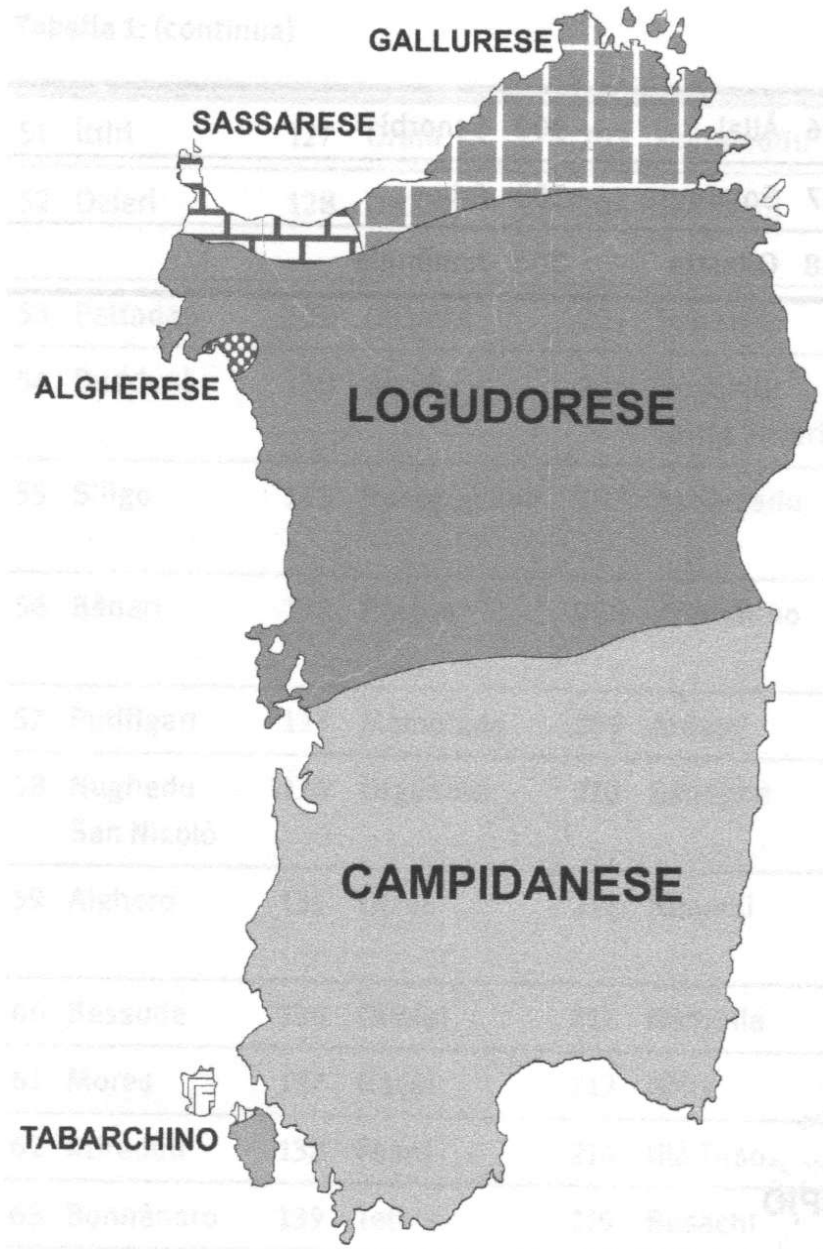
口蓋音化が生じない：Lat. centu(m) > Sard. chentu「100」

- サルデーニャ語は、ロマンス諸語の中で独立した言語グループを形成する (Cf. Bossong 2016: 65)

- イタリア語との 2 言語使用

サルデーニャ語の方言分布

(Pintus 2017: 532)



Carta 3: Le due macrovarietà sarde e le varietà alloglotte

(2) シチリア語

- 東部・中部方言と西部方言に分かれる (Ruffino 1997: 365-367)
- イタロ・ロマンス語の南部方言に属する
- イタリア語との 2 言語使用

(3) コルシカ語

- 北部方言と南部方言に分かれる (Dalbera-Stefanaggi 2002: 69f.)
- イタロ・ロマンス語の中部方言に属する
- イタリア語トスカーナ方言の影響が強く見られる
- フランス語との 2 言語使用

ロマンス諸語の系統

（俗）ラテン語

イベロ・ロマンス語
　ポルトガル語
　スペイン語
　ガリシア語
　カタルーニャ語

ガロ・ロマンス語
　フランス語
　オック語
　フランコ・プロヴァンス語
　ロマンシュ語　など

サルデーニャ語

イタロ・ロマンス語
　北部方言
　中部方言
　　コルシカ語
　南部方言
　　シチリア語

バルカン・ロマンス語
　ルーマニア語
　ダルマチア語（死語）
　など

（西ロマンス諸語）

（東ロマンス諸語）

3. 地域的特徴

島嶼ロマンス語の地域的特徴

ロマンス諸語の中で異なるサブグループに属しているが、外的な要因によって、共通の特徴を持つ

(1) ラテン語 ll > そり舌の dd [ɖɖ]

Lat. caballu(m) > Sard. caddu, Sic. cavaddu「馬」

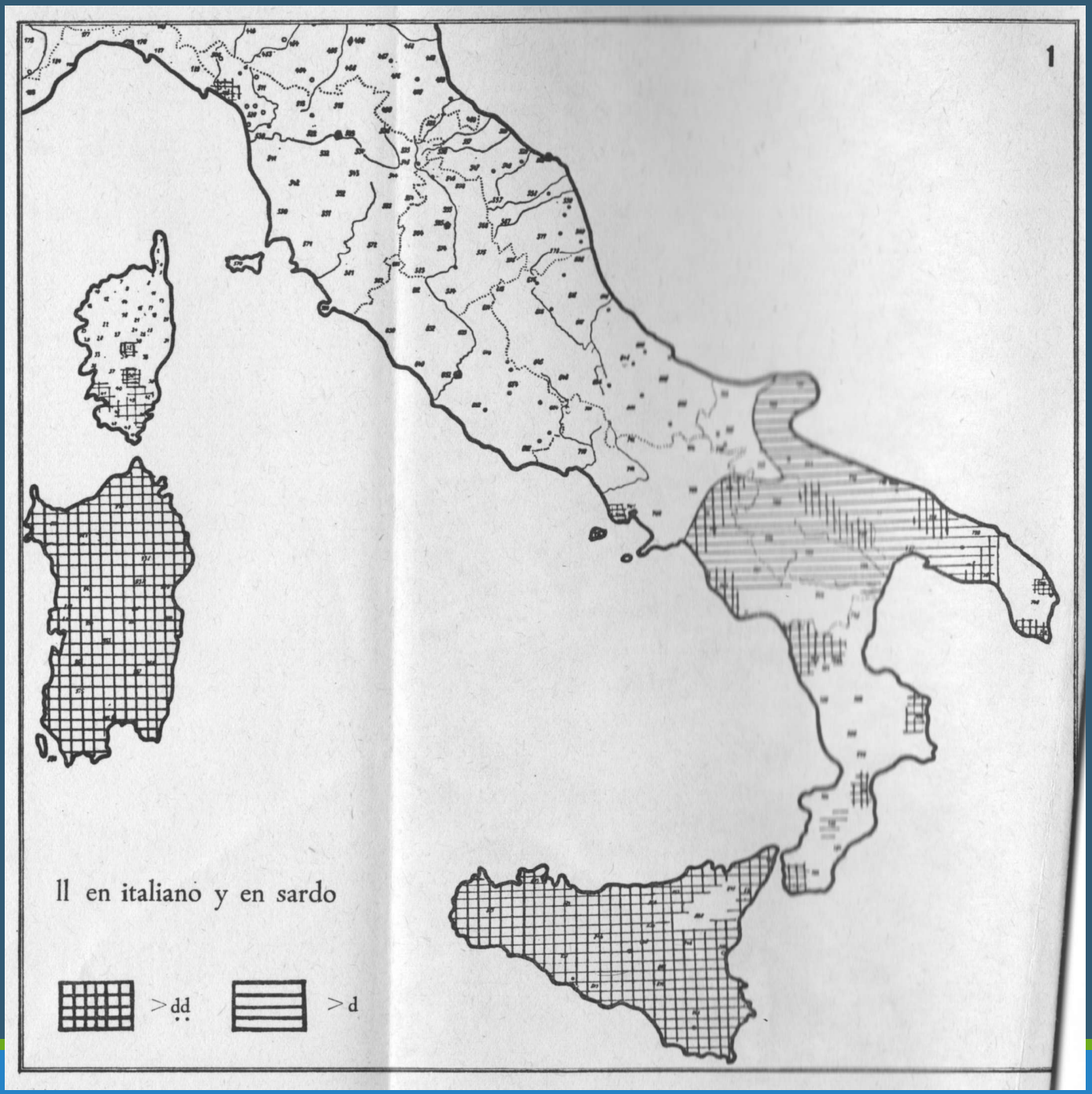
Lat. nulla > Cor. nudda「何も～ない」(Rohlfs 1966: 330)

⇒地中海基層言語の影響？(Millardet 1933, Wagner 1951, Tagliavini 1982, Blasco Ferrer 1984 etc.)

地中海基層言語とバスク語の関係も指摘されている (Cf. Wagner 1951, Blasco Ferrer 2010, 2017)

Lat. ll > dd

（Wartburg 1971 地図 1）



(2) アラビア語の影響 (Tagliavini 1982: 312f.)

サルデーニャ 11 世紀～、シチリア 8 世紀～：サラセン人の侵入

arba’tá’š「14 番目の」⇒ Sard. Arbatax（地名）

amīr「司令官」⇒ Sic. ⇒ It. ammiraglio「提督」

dār-aṣ-ṣinā’a「工務店」⇒ Sic. ⇒ It. arsenale / darsena「造船所」

angul「ロールパン」⇒ Sard. anguli「ゆで卵を挟んだパン」

qal’at al-gīrān「洞窟の城」⇒ Sic. Caltagirone（地名）

(3) フェニキア語の影響

カルタゴ人によるサルデーニャの支配（紀元前 6 世紀～紀元前 3 世紀）

フェニキア語		サルデーニャ語
sikkiria	⇒	tsíkkiria「ウイキョウ」(DES: 805)
zibbir’	⇒	tsíppiri 「ローズマリー」(DES: 808)
maqom「町」	⇒	Macomer（地名）(Wagner 1951: 156, Tagliavini 1982: 123)

4. Differential object marking

Differential object marking (DOM): いくつかのロマンス諸語では、特定の文法的特徴を持つ直接目的語が前置詞 a(d) / pe によってマークされる (Rohlfs 1972, Bossong 1991, Aissen 2003, Irmia and Mardale 2023 etc.)

ロマンス諸語における DOM 出現に関わる要素：

直接目的語の意味的特徴：有生性、定性、特殊性

情報構造：トピック性

有生性の階層 (Croft 2003: 130)

1, 2 人称代名詞 > 3 人称代名詞 > 固有名詞 > 人間の普通名詞 > 人間以外の有性名詞 > 無生物名詞

4.1 サルデーニャ語の DOM

現代サルデーニャ語における DOM (Jones 1995: 38-39, 41)

(1) a. Appo vistu solu a isse.　私は彼だけを見た。

b. Appo vistu a Juanne.　私は Juanne を見た。

c. Appo vistu a frate tuo.　私は君の兄弟を見た。

d. Appo vistu (?a) su mere.　私はボスを見た。

e. Appo vistu (?a) cudd'omine. 私はあの男を見た。

f. Appo bitu (*a) latte.　私は牛乳を飲んだ。

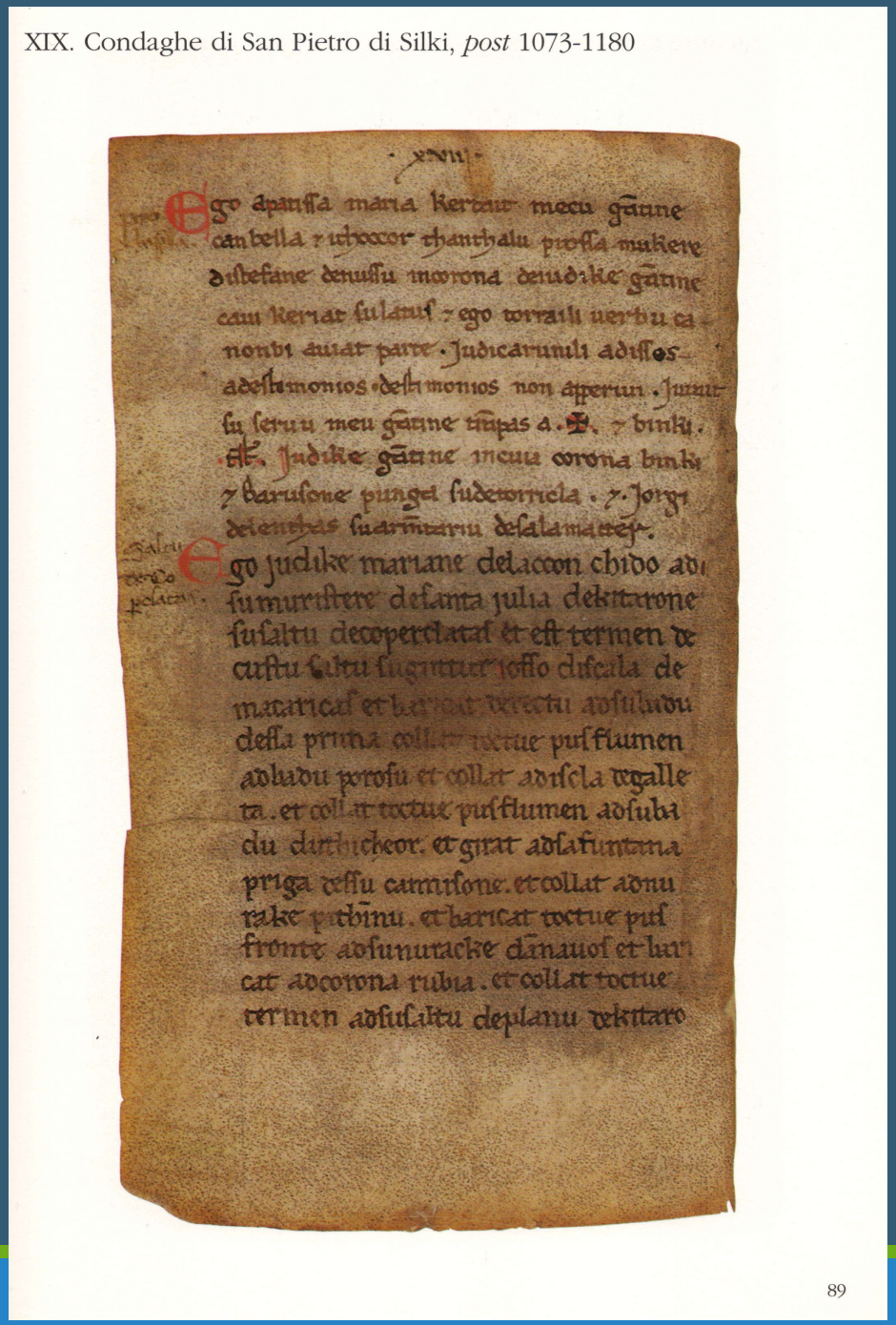
古サルデーニャ語における DOM (Kanazawa 2023)

文献： *Condaghe di San Pietro di Silki*（11 - 12 世紀）(Soddu and Strinna 2013)

コンダーゲ：教会で作成された文書。訴訟、土地売買、領土の分配、財産の寄進、物々交換について記録された。

Condaghe di San Pietro di Silki

（サッサリ大学図書館所蔵）



XIX. Condaghe di San Pietro di Silki, *post* 1073-1180

89

Blasco Ferrer (2003: 89) から引用

- 単数形の直接目的語における DOM

人称代名詞

(2) et osca tenni=nde corona cun sardos, cun ken la

and then have.PF.1SG=there court with Sardinians with whom her

aueat ad issa scu. Petru in corona de iudike in

have.IMPF.3SG DOM her St. P. in court of Giudice in

Kitarone (28)

K.

「そして St. Petru と彼女（奴隷）を共有したサルデーニャ人に対して、私は Kitarone 王の法廷で訴訟を起こした」

固有名詞

(3) e fekerun .iiij. fiios, a Maria, et a Gauini,
and make.PF.3PL 4 sons DOM M. and DOM G.
et a Justa, et a cCaterini (27)
and DOM J. and DOM C.
「そして彼らは 4 人の子ども、Maria、Gauini、Justa、Caterini をもうけた」

目的語が無生物の場合、DOM は現れない

(4) et ego torrai=li uerbu ca non bi auiat parte (3)
and I return.PF.1SG=him word COMP not there have.IMPF.3SG right
「そして私は彼に権利はないという言葉を返した」

親族名詞

(5) Posit donikellu Ithoccor a scu. Petru a fiiu de

donate.PF.3SG donikellu I. to St. P. DOM son of

Forasticu Thinga, cun parthone sua (55)

F. T. with property his

「Ithoccor 氏は Forasticu Thinga の息子を彼の財産とともに St. Petru に寄進した」

(6) a patre tuo=nde uinkeran in su patre de Petru Corsu (103)

DOM father your=there win.PLUPF.3PL in the father of P. C.

「彼らは Petru Corsu の父親に関してあなたの父親に勝訴していた」

人間の普通名詞には DOM ではなく、定冠詞が現れる

(7) torra=la s’=ankilla de scu. Petru, ca non ti la

return.IMP.2SG=her the=slave of St. P. because not you her

uolen dare (66)

want.PRES.3PL give.INF

「St. Petru の女奴隷を返せ。彼らは彼女をあなたに渡したくないのだから」

⇒ DOM と定冠詞（および指示形容詞）は相補分布をする傾向にある

- 単数形の直接目的語における DOM のまとめ

DOM の出現に関して、単数形の親族名詞は人称代名詞、固有名詞と同じ有生性の階層に位置づけられる

- 複数形の直接目的語における DOM

親族名詞

(8) Ego prebiteru Petru Iscarpis ki parthiui homines cu’

I bishop P. I. REL divide.PF.1SG men with

nontho Petru de Kentu Istafla, a fiios de Petru

delegate P. of K. I. DOM sons of P.

Calfe...(26)

C.

「私 Petru Iscarpis 司教は、その人たちと Petru Calfe の子どもたちを Petru de Kentu Istafla 使節と分けあった」

一方、親族名詞が DOM ではなく定冠詞をともなうケースもある

(9) Ego piscopu Jorgi ki parthiui sos fiios de prebiteru

I bishop J. REL divide.PF.1SG the sons of bishop

Migali e de Maria Capillu, cum prebiteru Surssitanu (35)

M. and of M. C. with bishop S.

「私 Jorgi 司教は、Migali 司教と Maria Capillu の子どもたちを Surssitanu 司教と分けあった」

親族名詞と同様に、人間の普通名詞では DOM か定冠詞のいずれかが現れる

(10) torrate=mi sas ankillas meas, ki sun pecuiares
return.IMP.2PL=me the slaves my REL be.PRES.3PL property
de scu. Petru (42)
of St. P.
「St. Petru の財産である私の奴隷たちを私に返せ」

(11) e derun=ilos a sseruos a scu. Petru in corona
and give.PF.3PL=them DOM slaves to St. P. in court
de iudike Gunnari in Nurra (120)
of Iudike G. in N.
「そして彼らは Nurra の Gunnari 王の法廷で奴隷たちを St. Petru に渡した」

- 複数形の直接目的語における DOM のまとめ

DOM の出現に関して、複数形の親族名詞は人間の普通名詞と同じ有生性の階層に位置づけられる

DOM の出現に関して単数形の親族名詞は、有生性の階層において、固有名詞と同じ位置づけにある。一方、複数形の親族名詞は、有生の普通名詞と同じ位置づけにある

単数形

代名詞 > 固有名詞 > 親族名詞 > 有生名詞 > 無生物名詞

DOM

定冠詞

複数形

DOM

代名詞 > 固有名詞 > 親族名詞 > 有生名詞 > 無生物名詞

定冠詞

4.2 現代シチリア語の DOM (Iemmolo 2007)

人称代名詞

(12) Chiddru chiama a mmia. (ibid. 343)

that call.PRES.3SG DOM me 「あの人が私を呼んでいる」

固有名詞

(13) Canuscivu a Luvici. (id.)

know.IMPF.1SG DOM L.「私は Luvici を知っていた」

単数形の親族名詞

(14) Arrubbaru a so cuscinu. (ibid. 344)

abduct.PF.3PL DOM his cousin「彼らは彼のいとこを誘拐した」

人間の普通名詞では、DOM が現れることはまれであるが、指示形容詞をともなう場合は現れる

(15) Talia a ssu picciliddru. (id.)
look.IMP.2SG DOM this boy
「この少年を見よ」

複数形の親族名詞では DOM は任意であり、また DOM と定冠詞は共起可能

(16) Arrubbaru (a) i so cuscini. (id.)
abduct.PF.3PL DOM the his cousins
「彼らは彼のいとこたちを誘拐した」

⇒ DOM の出現と目的語の数の関係について、古サルデーニャ語と共通する点がある

4.3 コルシカ語の DOM (Neuberger & Stark 2014: 374-379)

人称代名詞

(17) S’=è tù inganni a terra, da dopu a terra

If=be.PRES.3SG you betray.PRES.2SG the earth afterwards the earth

inganna à te.

betray.PRES.3SG DOM you

「もしあなたが地球を裏切るなら、地球もあなたを裏切る」

固有名詞

(18) Vegu chè tù preferisci più à Peneloppe
see.PRES.1SG COMP you prefer.PRES.2SG more DOM P.
chè à mè.
than DOM me
「私は君が私より Peneloppe のほうが気に入っているとわかった」

親族名詞

(19) Ha lasciatu in paesi a moglie cù due figlioi masci,
have.PRES.3SG leave.PTPL in village the wife with two sons male
una fèmina è à mamma ancu à nascia.
a female and DOM mum still to born
「彼は村に妻と 2 人の息子、ひとりの女性とまだ生まれていない母親を残した」

DOM と定冠詞の相補分布

(20) ...avia dettu Dumè, scusa di furzà (*à) u so amicu
...have.IMPF.3SG say.PTPL D. excuse to force.INF DOM the his friend
à parlà.
to speak.INF
「Dumè は彼の友達に話をさせるための口実を言った」

(21) Vigu *(à) l'=omu.
see.PRES.1SG DOM the=man
「私はその男を見る」

⇒DOM の出現は有生性に加えて、定冠詞との共起＝定性にも強く動機づけられている可能性

第 4 節のまとめ

3 つの言語において、DOM の分布に細部に異なりは見られるものの、有生性がかかわっている点は共通している。（DOM を持つロマンス諸語全般に共通）

4. まとめ

DOM が観察されるロマンス諸語

イベロ・ロマンス語

イタロ・ロマンス語のうち南部方言

バルカン・ロマンス語

サルデーニャ語

コルシカ語

DOM が観察されないロマンス諸語

ガロ・ロマンス語

イタロ・ロマンス語のうち北部・中部方言（コルシカ語のぞく）

ロマンス諸語における DOM の分布

（俗）ラテン語

イベロ・ロマンス語
ポルトガル語
スペイン語
ガリシア語
カタルーニャ語

ガロ・ロマンス語
フランス語
オック語
フランコ・プロヴァンス語
ロマンシュ語　など

サルデーニャ語

イタロ・ロマンス語
北部方言
中部方言
コルシカ語
南部方言
シチリア語

バルカン・ロマンス語
ルーマニア語
ダルマチア語（死語）
など

（西ロマンス諸語）

（東ロマンス諸語）

➢地中海的要素としての DOM

Ramat (2003) は、マルタ語やスペインのアラビア語にも DOM が観察されることから、DOM を地中海の言語の特徴のひとつと考えることを提案している

マルタ語 (Ramat 2003: 23)

(22) It=tifel ra lil Marija.

the=boy saw DOM M.「その少年はマリアを見た」

(23) It=tabib bahat lil=u.

the=doctor sent DOM=him「その医者が送ったのは彼だ」

- 3 つの言語に観察される別の共通点

分析的な未来形「HAVE 動詞の直説法現在＋前置詞＋不定詞」

Sard. appo a cantare

Sic. aiu a cantari

Cor. aghju da cantà

「私は歌うだろう」

Cf. ほかのロマンス諸語「不定詞＋ HAVE 動詞の直説法現在」

It. canterò, Sp. cantaré, Fr. chanterai「私は歌うだろう」

- まとめ

地中海島嶼ロマンス語は、ロマンス諸語の中でそれぞれ異なるサブグループに属する

DOM はロマンス語圏に広く観察される現象であるが、島嶼ロマンス語はほかの地域から独立した形でこの現象を共有している

⇒地域言語学的な概念としての「南ロマンス諸語」を認めることの可能性

略号一覧

COMP: 補文標識

IMP: 命令

INF: 不定詞

PL: 複数

PRES: 現在

REL: 関係代名詞

1-3: 人称

DOM: differential object marking

IMPF: 未完了過去

PF: 完了

PLUPF: 大過去

PTPL: 過去分詞

SG: 単数

参考文献

Aissen, J. (2003). Differential object marking: Iconicity vs. economy. *Natural Language and Linguistic Theory*, 21(3), pp. 435–483.

Blasco Ferrer, E. (1984). *Storia linguistica della Sardegna.* Tübingen: Max Niemeyer.

Blasco Ferrer, E. (2003). *Crestomazia sarda dei primi secoli.* Vol. 2. Nuoro: Ilisso.

Blasco Ferrer, E. (2010). *Paleosardo*. Berlin: Walter de Gruyter.

Blasdo Ferrer, E. (2017). Paleosardo: Sostrati e toponomastica. In E. Blasco Ferrer & P. Koch (Eds.), *Manuale di linguistica sarda* (pp. 67–84). Berlin: Walter de Gruyter.

Bossong, G. (1991). Differential object marking in Romance and beyond. In D. Wanner & D.A. Kibbee (Eds.), *New analyses in Romance linguistics. Selected papers from the XVIII Linguistic Symposium on Romance Languages, Urbana-Champaign, April 7–9, 1988* (pp. 143–170). Amsterdam: John Benjamins.

Bossong, G. (2016). Classifications. In A. Ledgeway & M. Maiden (Eds.), *The Oxford guide to the Romance languages* (pp. 63–72). Oxford: Oxford University Press.

Croft, W. (2003). *Typology and Universals*. Cambridge: Cambridge U. P.

Dalbera-Stefanaggi, M-J. (2002). *La langue corse*. Paris: PUF.（日本語訳 渡邊 淳也 (2020)『コルシカ語』白水社）

DES = Wagner, M. L. (2008). *Dizionario Etimologico Sardo*. Nuoro: Ilisso.

Iemmolo, G. (2007). La marcatura differenziale dell'oggetto in siciliano: un'analisi contrastiva. In M. Iliescu, H. Siller-Runggaldier, & P. Danler (Eds.) *Actes du XXV Congrès International de Linguistique et de Philologie Romanes, Innsbruck, 3 September 2007 - 7 September 2007*, pp. 341–350.

Irmia, M. A. & Mardale, A. (2023). *Differential Object Marking in Romance. Towards microvariation*. Amsterdam: John Benjamins.

Jones, M. A. (1995). The prepositional accusative in Sardinian: Its distribution and syntactic repercussions. In J.C. Smith & M. Maiden (Eds.), *Linguistic theory and the Romance languages* (pp. 37–75). Amsterdam: John Benjamins.

Kanazawa, Y. (2023). Differential object marking in kinship terms and animacy hierarchies in Old Sardinian. In Irmia, M. A. & Mardale, A. (2023). *Differential Object Marking in Romance. Towards microvariation* (pp. 250–263). Amsterdam: John Benjamins.

Millardet, G. (1933). Sur un ancien substrat commun a la sicile, la corse et la sardaigne. *Revue de Linguistique Romane*, 9, pp.346–369.

Neuberger, K. A., & Stark, E. (2014). Differential object marking in Corsican: Regularities and triggering factors. *Linguistics*, 52 (2), pp. 365–389.

Pintus, A. (2017). Carte. In E. Blasco Ferrer & P. Koch (Eds.), *Manuale di linguistica sarda* (pp. 527–565). Berlin: Walter de Gruyter.

Ramat, P. (2003). Il sardo fra le lingue di Mediterraneo. In Corvetto, L. (Ed.) *Dalla linguistica areale alla tipologia linguistica : atti del Convegno della Società italiana di glottologia.* pp.15–33.

Rohlfs, G. (1966). *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti. Fonetica.* Torino: Giulio Einaudi Editore.

Rohlfs, G. (1972). Autour de l'accusatif prepositionnel dans les langues romanes. *Revue de Linguistique Romane*, 35, pp. 312–334.

Ruffino, G. (1997). Sicily. In M. Maiden & M. Parry (Eds.) *The Dialects of Italy* (pp. 365–375). London: Routledge.

Soddu, A. & Strinna, G. (Eds.). (2013). *Il Condaghe di San Pietro di Silki*. Nuoro: Ilisso.

Tagliavini, C. (1982). *Le Origini delle Lingue Neolatine*. Bologna: Pàtron editore.

von Wartburg, W. (1971). *La fragmentación lingüística de la Romania.* Madrid: Gredos.

Wagner, M. L. (1951). *La lingua sarda*. Nuoro: Ilisso.

ご清聴ありがとうございました。

本研究は、JSPS 科研費（課題番号：23K00514「形態統語論の地域特徴に基づく「南ロマンス諸語」の確立に向けた歴史言語学的研究」、課題番号：19K00563「未記述方言の形態統語論から見たサルデーニャ語の歴史的・類型論的研究」）による研究成果の一部です。